

「投稿者」なるたか

「本文」

「みんなの力を合わせれば」

それは宝石のような言葉

それは湖底に沈んだ財宝

湖上の私は永遠に手が届かない

「END」



情報求む！

あなただけじゃありません。まずは相談から

ひよっとしたら？から始めましょう

ここに仲間がいます。コミュニティに参加してみませんか？

桐島秀（きりしましゅう）はタバコをふかしながら画面を食い入るように見つめていた。秀は極度の猫背で、首から頭を前に突き出し、ブツブツと独り言を言いながら時折舌打ちをするのが仕事上の癖だった。切れ長の両目が細かく上下左右に躍動する姿は、さながら現代の狩人を思わせる。

暗い部屋の中にはディスプレイの明かりのみが煌々と灯り、背面の壁へと秀の姿を写し取っていた。

登録料無料！

動画あります

1万円還元キャンペーン

人気ランキング

噂の激安オークション

画面を素早く上下にスクロールさせる。フケだらけの髪を左手で乱暴にかき上げながら右手でマウスをクリックする。

「んー。うん、よし……ん、おっけー。完了っ」と

キツネ目が一転、パツと見開かれると、続けて大きく伸びをしてデスクを離れた。先ほどまでの呪術師のような独り言が、今度は童謡のごとく鼻唄へと変わる。冷蔵庫から缶ビールを取り出して一口飲むと、新しいタバコに火を付け、猫背に詰めこんでいた息を煙とともに中空に吐き出した。

秀はサーバーの構築やメンテナンスの仕事を企業から下請けすることを生業としていたが、他にも時折、ウェブサイトの作成やセキュリティ対策の実装なども手広くかつ慎重しく行っていた。商売の規模は小さいが秀はこの仕事を気に入っていた。自分のペースで、やれる範囲の仕事を、自分で管理し自分で選び、食うに困らない程度だけ行う。実際、秀の腕は一般的にはかなり優秀な部類に入るため、仕事の依頼は絶えなかった。しかし秀にとってはそういう些事よりもっと大事なことがあった。それは孤独と自由の保守。独りで仕事することでわずらわしい人間関係が無く、例えひきこもろうと、日がな一日パチンコしようとして、3日徹夜した後には2日寝続けようと、誰にも文句を言われないことが何よりありがたいのだった。

床に散乱したコンビニ弁当の抜け殻を蹴飛ばし、くわえタバコのままサンダルをひっかけドアを開ける。

秀の家は住宅街の中にある古ぼけたマンションの最上階だった。屋上の元々は倉庫だった部分をリフォームして住居にしたのだが、案外居心地は悪くないと感じていた。家の扉を開けるとすぐそこが屋上で、ところどころひび割れたコンクリからは雑草や苔が生え、剥がれたトタンの破片や手すりのサビの塊がそこらに転がっていた。目線の先には遠くに新宿の夜景が見え、その逆側には天気が良ければ富士山が見えることもあった。

屋上をブラブラと歩きながら再び伸びをし、首を鳴らす。肩凝りはソフトウェア技術者の職業病だが秀は特に首の凝りがひどかった。そこで編み出したのが猫背で首を前に突き出す姿勢だ。身体をいたわるための実用書などに書いていることとはむしろ真逆の行為だが、秀の肩凝りはこの姿勢を取ることで飛躍的に軽くなった。また、もし他人がそれを見ていたらいかにも不格好で印象が悪いのだが、秀はそんなこと微塵も気にしていなかった。「要は生産性」と秀は言う。自分分はひとりで仕事しているからそんなこと意識する必要が無い、と。秀は徹底的な合理主義者で不要なものを削って、削って、削っていったら結局自分一人で仕事をするようになっていた。無精髭で満たされた顎、首の伸びたTシャツ、980円で買ったハーフパンツからのぞくいかにも運動不足な細いふくらはぎ。そんな全てを秀は「悪くない」と思っていた。

秀は仕事の上ではネット関連の『システム屋』を名乗っていたが、彼と深く関わった人はみな彼のハッキングやクラッキングのスキルが突出していることを知っていた。そのため公ではなくこっそりとその手の依頼が舞い込むことも少なくはなかったが個人で小回りが利く分、しばらくは、監視も無く、合法と非合法のギリギリのことをやり、やばくなったらすぐケツをまくる。そういう身軽さが秀のスタイルだった。

タバコが半分ほどになったところでポケットの中から無機質なベルの音がする。メールだった。

「差出人」 田畑護

「宛先」 桐島秀

「本文」

シュウくん助けて

「END」

田畑護（たばたまもる）は小中学校の同級生で、今は冴えない会社の冴えない営業マンだ。元々、小学生の頃はクラスが同じになったことが一度あったのだが、お互いに関わりは全くと言って良いほど無かった。しかし中一で再び同じクラスになると、ふとしたことから2人とも同

じミステリー作家の大ファンだということが判明し、本の貸し借りに始まり何かとつるむようになった。しかしどちらにも内向的な性格で世の中の的にはいわず『オタク』に属する存在だったからか、一般の健全な青少年に存在するような友情・努力・勝利といった類いのアツい間柄ではなく、もう少し冷めた、距離を置いた関係だったと秀は捉えていた。

とはいえ、2人の極めて活動的ではない振る舞いは外から見ると『似た者同士』のイメージを植え付けるには十分だった。しかしその実態は、『何もやろうとしない』秀とは対照的に、護は『何もできない』少年だった。運動も勉強も恋愛も、がんばろうとするけれどもうまくいかないことだらけ。そんな護から見ると秀の全ての物事に適切な距離を取ろうとするスタンスはとて『大人』に映り、実際護は何かと秀を頼りにしていた。

秀は小4の時に父親の仕事の都合で転校になり、その後なんとなく面倒でありしやべらずに本を読んでばかりいるうちに気付いたらクラス内で『根暗オタク』のポジションを与えられていた。しかし秀自身「確かに根暗なのは合ってる」と納得してしまい、むしろその冷遇を甘んじて受け入れていた。一方、生まれながらの口下手で引っ込み思案な護からすると、そんな秀は一風変わっていて、その分頼りがいがあるように感じる存在だったのだ。

また面倒な話じゃないだろうか、と思いつつも返信する秀。

「ま、ちょうど仕事も終わったところだからな」  
食わえタバコのままつぶやいた。



秀が屋上のベンチに腰掛けると空は新宿の方から赤らみ始めていた。護への返事を送り携帯をポケットに突っ込む。タバコを燻らせながら目を閉じると昨日からぶっ通しで作業していた身体の疲労を秀は感じた。頭の中で、今日こなししたこと、確認したこと、それで作業は足りているか、などを考えているとじきに眠気が増してきた。秀は昼夜関係なく仕事をしてきたが、そのぶん昼夜関係なく寝る生活をしてきた。家からほとんど出ることはなく半ひきこもり状態だが、元々内向的で自己主張がおつくうな性格からはこの小さいながらも『自分の城』がきちんとある生活は「悪くない」のだった。

一方、護はというと、仕事は製薬メーカーの営業をやっていた。メーカーの営業というのは技術的な知識が要求されるの言うまでもない。護は大学が薬学系でその分野における専門知識は十分にあったが、しかし仕事の本質はやはりどこまでいっても営業なのであって、付き合いは重要だし、口先が上手い者がそうでない者よりも多くの成功をおさめるということも歴然とした事実だった。したがって口下手で押しの弱い護が上げる成果量は常に芳しかった。秀は、今の仕事は収入が不安定で生活は不健康だが、自己の性格にきちんと合った職を見つけた自分は護より幾分もまともだと思っていた。

うつらうつらし始めたところでポケットからの振動でハッとす。護からの電話だ。「さっきの件だろうけど、こんな朝早くに？」いぶかしげに通話ボタンを押す。

「もしもし」

「秀くん、起きてた？僕……どうしたらいいかわかんなくって……」

「あのさ、メールにも書いたけど、話が全然読めねえ」

「ごめんね、僕としても、なんていうか、どうしていいかわからなくて、そんなことでまたシェウくんに相談するのも悪いなあって」

「前置きはいいいからさ」

もう、めんどくせえ、という空気が秀の語気にはこもっていた。しかし護はそれを感じずに続けた。

「あのね、最近僕、あるサイトにハマってて、元々詩とか小説とか好きだから……けっこういろいろなサイトがあるんだけど、その中でもポエムスタってサイトが好きで、なんていうかSNSの機能が……」

言わずもがな、護は空気が読めないタイプの人間だ。とはいえ小器用に空気を読んで世の中を渡り歩いて行くような輩に対して秀は吐き気がするほどの嫌悪感を抱いていて、不器用で口下手な人間の方にむしろ好感というか共感に近いものを抱いていた。しかしさすがに護のレベルだとたまにイラつくことがある。悪趣味な連中のイジメの対象に見事選別されてもまったくおかしくない典型的な素養を、護は残念ながら持っていた。

「もう、いいから。お前さ、まず事実と要点から言えよ。じゃねえとツツコミのしようもリアクションの取りようもねえぞ。わかるだろ？」

「う……ごめん……」

すぐシュンとなるのも護の悪い癖だと秀は思っていた。そもそもなんだかんだ言って護と秀の仲は長かった。普通は中学の同級生なんて高校大学と人間関係が広がるに従って離れていくものだが、現に秀はこんな非常識な時間の護の電話をわざわざ受けている。そのくらの間柄の友人なのだから、もう少し堂々と彼自身の主張ややり方を通して構わないと秀は思っていたのだ。しかし貧弱な体型よりさらにふた周りもひ弱な護の心臓は、何か強く否定されるとたんにダンゴムシのごとくになってしまふということも秀は知っていた。

秀は一息置いて新しいタバコを取り出し、火を付ける。

「悪かったよ。ま、いいから順序立ててしゃべってみ」

「うん、ありがとう。秀くんはいつも優しいよね」

「そんなんじゃないよ。まったく、お前はいつも恥ずかしいことを平気で言うな」

護が笑顔になった雰囲気から伝わり秀も一息鼻を鳴らす。

「で、どうしたよ？」

そのあと護から出た言葉は、秀にしてみるととても意外で、しかも妙な違和感を覚えた。

「実はね……あるアカウントが突然消えたんだ」

数秒の空白の後、秀はそのわずかな違和感を横にどけ、冗談ぽく切り返す。

「おいおい、なんだよ護。おれ徹夜明けなんだぜ。カンベンしろよ」

護は無言だ。

「その程度でおおげさ過ぎ。よくある話だろ？」

「実は……そのアカウントの女性と、昨日の夜に会う予定だったんだ」

珍しい。これまで護から女性がらみの話題を切り出されることなんて数えるほどだった。しかもそのほとんどが一方的な片思いでしかも告白はおろか、ろくに話しかけることもできないような代物ばかりだった。秀の中での違和感が濃度を増した。

「そんな、世の中じゃよくあるぜ。遊ばれただけじゃねえのか？」

「でも、それならただすっぱかせばいいだけだよね。それなら……経験が無いわけじゃないよ

……」

深刻さが秀に伝わった。護なりに考えた末に電話してきたのだ。

「実際昨日はそう思ってた。待ち合わせの場所で2時間待ってて、そろそろ、おかしいな思ってた連絡入れようとしたら……アカウントが消えてた。そのあと家に帰って、彼女と交流があったサイトを回ってメッセージを残してみたんだけど反応が無くて、直接連絡取ろうにもチャットのアカウントも消えてた。まるで彼女は元々存在しなかったみたい……」

「随分と徹底してるな」

「そうだね。こんなことネットに詳しい秀くんに言う必要ないけど」

「いいよ、言えよ」

「だってさ、もし遊びだしたらアカウントって捨てちゃえばいいよね。ネット上のコミュニティとかにはそういうゾンビアカウントっていっぱいあるはず。古いアカウントは放置したままにして他に新しいアカウントを登録し直して、実際はそっちを使うようにすればいいわけで」

「そこでわざわざアカウントを消すなんて意味がわからない。不自然だ、って言いたいわけだな。それは確かに一理ある」

護の声がばあっと明るくなる。

「そうだね、やっぱおかしいよね！だって何も連絡がないんだよ。アカウントが消されてるからこっちからアクセスすることもできない。でもすっぽかしたりするようなコだなんて思えない。やっぱ、彼女の身に何かが起こったとしたか思えない。絶対に何かあったんだよ！」

「わかったから興奮すんな」

秀は新しいタバコに火をつけ直しひと呼吸置く。

「護、とりあえずわかる範囲で調べてみるから情報よこしな。その『彼女』との交流があったSNSだったり掲示板だったり投稿サイトだったりな。チャットは何でやってた？ソフトの名前と、護と『彼女』のアカウント名とか、まあ思いつく限りもろもろだ」

「わかった、すぐにまとめてメールで送るね」

電話口で護が喜んでいることが秀には伝わった。

「ホントに護は昔から世話がかかるよな」

「うん、いつもありがとうね。本当に秀くんには迷惑ばかり……」

「いいな、出世払いだぞ。つっても護は出世なんかしないだろうけどさ」

秀と護は笑い合って電話を切った。



秀は正直なところ気が進まなかった。電話では護に合わせて『彼女』と言ったが、実際はネット上のオカマ、『ネカマ』である可能性も高いと思っていた。

秀は情報収集の意味合いで世の中のメジャーなソーシャルメディア上にそれぞれ複数のアカウントを持っていたが、その半分は女性だ。理由は単純に情報収集能力を高める上で『女性』という識別情報が非常に有効だということを秀は知っていたからだ。実体なんてどうでも構わないのだ。そして交流相手とトラブルになりそうになったらすぐにアカウントを乗り換える。その際アカウントを消すまでやるかどうかは状況次第だが、その可能性はゼロとは言えない。

そう考えると護の言う『彼女』は、護以外の他の誰かとネット上でひどく深刻なトラブルになり、その結果、アカウントを消さざるを得なくなっただけなんじゃないのか？秀の脳裏にはある種の徒労感が想像されるが、先ほどの違和感が再び顔を出し、催促する。調べてみろよ、と。

秀は護との長年の付き合いから知っていることがあった。護は、スポーツはできない、かと

いつて勉強もさほどできるわけではない、人との交流も苦手、口下手、ダメダメだらけの普段の姿から想像がつかない一面を持っているのだ。

小学6年生の時に学校中のチョークが全て無くなる事件があった。

当時強引に学級委員なる重責を押し付けられていた護は、周囲の予想を裏切り犯人探しに必死になった。先生がホームルームで「ものを盗んではいけません」とか「ひとに迷惑をかけてはいけません」とかのお題目を唱え続けるなかで、護は「絶対こういうことをしちゃいけないんだ！悪いことをしたやつは反省しないといけない」と発言し、先生よりもよっぽど先生扱いと秀は感じた。さらに先生が道徳的な発言でその場を収めようとした時にも「罪はきちんと罪としてつぐなわせないと、その人のやり直す機会を奪ってしまうことになる」と主張し、クラス全員を驚かせた。しばらくして護は見事犯人グループを発見し、先生に報告し、そして想像に難くないことにそれがきっかけでイジメのターゲットにされた。

その後も護は随所で、普段の内向的な振る舞いとは不釣り合いに不器用な正義感を見せ、その都度しつぺ返しにあった。結果、多くのものは護から距離を置いていったが秀はその振る舞いが不思議と嫌いじゃなかった。

部屋に入りノートPCを覗き込むと護からメールが届いていた。いくつかの添付ファイルとメール本文にも散文的に情報が記してある。長文だ。秀は護から受け取ったデータを入れるためにPC上にフォルダを作成した。少しの間、首をかしげて考え込んでいたが、本棚が目に入るとすぐにニヤリとしながらフォルダ名を打ち込む。

# 『account\_murder\_case』

アカウント殺人事件、だ。



分厚いカーテンの間から部屋の中へと強い朝日が差し込んでくる。すでに時間は7時過ぎだった。秀の生活リズムからすればどうということはないのだがさすがに眠気は強い。護にメールを送ったらひとりで寝入りしようと秀は考えていた。ベッドの上に座り膝の上でキーボードを叩く。

「差出人」 桐島秀

「宛先」 田畑護

「本文」

オス。先に言っとくけどこのメール見たあとすぐに返信しても無駄だからな。おれは寝る。

とりあえず技術的な部分から。

ご依頼の『なるたか』についてはIPアドレスはほぼ特定した。

っていうのもお前らがやりとりしてたサイトのひとつ、『ボエムの森』ってところ。おれが管理者権限持つてるサーバー上なんだわ。

で、そこからキャッシュひっぱってきて履歴あさったらいろいろわかった。

まず『なるたか』の人物像だが、彼女は固定のIPアドレスの所有者ってわけではないんだけど、実際は完全にひとつのIPからのアクセスばかり。つまりネットにつなぎっぱなしって意味だ。しかも夜間や休日は当然としても、平日の昼にも同じIPからアクセスがある。

仕事の関係で24時間待機（おれみたいな）とかサーバー立てて仕事やってる業者とかだと固定IPだろうから、まあ一般人で単にネットにどっぶりいつちゃってるだけって断定していいんじゃないかな。

ヒマ人の主婦、学生、ひきこもりニート……まあそんなとこだ。

で、IPからだいたい場所を特定すると東京都C市の東部、添付した地図上に丸で囲った辺りだ。おれらの家も入ってるエリアだな。

それとネット接続の契約業者もわかった。あそこセキュリティ弱いんだよな。

やろうと思えば契約者情報もパクってできるから、犯罪者になる覚悟ができれば言うてくれ。笑

あとアカウント削除の経緯はよくわからないけど、本人によって消されたものだったのはハッキリした。

不適切な書き込みとか他ユーザーとのトラブルとかで管理者側が消したもんじゃないな。

記録では、3月6日の午後10時23分。

さて、以下は『なるたか』の書き込み内容からわかったことだ。

まず、いろんなデータベースと照合してみたけど場所を特定できるような書き込みは一切無し。SNS上のプロフィールも設定が未公開になってるけど、そもそもプロフィールを書いてないな、こりゃ。でもまあ別に珍しいことでもない、特に女性だったらそんなもんだろ。

あと頻出単語を分析してみたら発言が家から見える光景に偏ってるな。あまりアクティブではないってことか？

ネットにどっぶりいつてるならそんなもんか。

あとな、あるところと同じIPからの書き込みを見つけた。なんとなくひっかったんだが、「ひとりでいると時間が止まっているように感じる」

「あの人を待っている時間、それが自分の価値を感じることができる時間」

普通の恋の詩のようにも思えるんだけど、何か不自然なものを感じた。

ま、これはおれの個人的な感想だ。

他にもキャッシュから拾って来た過去のやりとりを添付するから、ちょっと目を通してみ。

あと『なるたか』が出入りしていたサイトのリストも付けとく。

では一旦寝る。なんか気付いたらメールしといてくれ。

間違っても電話すんじゃないぞ！

「END」

メールを送信してノートPCを閉じる。秀にはひとつ気になっていることがあった。『なる

たか』のIPアドレスからのアクセスが例のアカウントが消された日以来ぱったりと途絶えているのだ。あれだけ頻繁にアクセスしていたことから、かなりネットに依存した生活を送っている人物だと思われるが、それがあつた時を境にパタリとネットをやめたとはなかなか考えにくい。しかしそういう事情はいくつも考えられることは秀も承知していた。例えば海外旅行にでも行っているのかもしれないし、PCが壊れたのかもしれない。ネット接続業者を解約したかもしれないし、そもそもたまたま暇が無いただけかもしれない。

いずれも事件性なんて考えるのがバカバカしいほど、完全な個人の事情だ。まったく、護は昔から変わらない。たかがアカウントが消えたくらい、と思いつつ秀はベッド脇のサイドテーブルへノートPCを放り、布団をかぶつた。

すっかり頭に住み着いてしまった違和感は、取り払うどころか徐々に大きく育ってきていた。しかし現時点では徹夜明けの秀の睡眠欲が圧勝を収めた。



メールの着信音で秀は目を覚ました。携帯を開くとメール受信が5件、時計は12時を回っていた。

携帯を片手にトイレに入る。メールの5件中3件はメルマガ、1件は仕事の依頼、本命は最後の1件だ。それを開き、じっくりと内容を熟読する。

トイレから出ると昨日コンビニで買ったスティックパンとパックの豆乳を右手で握み、ノートPCをその脇に抱えたままドアを開けベランダへ出る。すると春の兆しを感じさせるポカポカ陽気が秀を迎えた。秀は他人から見ると明らかなひきこもりだが、真の意味でひきこもりではなかった。というのもこうやって日光浴をするのはむしろ好きなのである。

秀は元々スポーツをしたりショッピングに出かけるほどアクティブだったことは人生で一度たりとも無かったが、狭い部屋の中で長時間PCと向き合つてばかりいると気が滅入る、という正常な感受性はギリギリ持ち合わせていた。そういった意味で日光浴は秀なりの絶妙なバランス感覚から習慣づけられているものだったのだ。

小汚い屋上の小汚いベンチ。でもこれが良いのだ。

2個目のスティックパンを頬張りながらノートPCを開くと護からのチャット要求が入っていた。左手で携帯を操り手際良くさきほどのメールを開き、同時に右手で護とのチャットをオープンする。

shiu: いま起きた

mamoru: やつとつかまった。こっちは会社。昼休みです

shiu: ひとつ報告がある

shiu: おまえの元上司 失踪してるらしいな

mamoru: え、何で知ってるの？僕も今朝知つたのに

shiu: ちよつとある協力者からな

shiu: その元上司、ナルセって言うらしいな

mamoru: うん。成瀬課長。下は、なんだつたつけ

shiu: タカオだよ

mamoru: そうだそうだ。成瀬孝男さんだ

mamoru: ひよつとして



shiu: そ、ナルセタカオで『なるたか』だ 失踪したタイミングもバッチシ

mamoru: 確かに一昨日の3月6日を最後に出社してないって言ってた。ぴったりだね

shiu: ショックか？

mamoru: それは、無いと言ったら嘘になるよ。完全に女性だと思ってたから

shiu: 確実な証拠は無いが現時点でかなり確率が高いな

mamoru: そう……

shiu: ナルセはどんな上司だった？

mamoru: 同じ部署だったのは1年ちよつとだったから深い仲じゃないけど、一度2人で出張先で飲んだことがあるよ

mamoru: あの人、年齢だけで課長にされて、なんか柄じゃないって感じだった。本人もそう言うてたよ

shiu: 典型的な団塊世代のサラリーマンってか

mamoru: 性格は大人しくて口下手で

shiu: 誰かさんみたいだな

mamoru: そうだね。はつきり言って共感に近いものはあったよ

mamoru: 自分は何も持っていない、何も良いことも無い、特技も無いし趣味も無い、でも妻だけは自分には出来過ぎな良い妻だった。って言ってた

shiu: その奥さんだが、数年前に亡くなってるな

mamoru: え？ そうなの？

その時、秀に他のアカウントからのチャット要求が入った。

shiu: さつき言った協力者 ちょうどいいからチャットに入ってもらうぞ

fukahileがチャットに加わった。

shiu: お疲れさまです。ログ見えてます？

fukahile: ありがとう。見えてるよ

fukahile: mamoruさん、初めまして

mamoru: 初めまして。シュウくんの仕事関係の方ですか？

fukahile: そうですね。そんなもんかな

shiu: 今のスポンサー様だよ

fukahile: 桐島くんの腕にはいつも助けていただいています

shiu: フカさん、ナルセの奥さんの件について

fukahile: 桐島くんにはメールしたけど、うちのデータベースに登録があったよ。でも有名な事件だから普通にネットで調べれば出てくると思う

mamoru: すみません、fukahileさんの言うデータベースって何ですか？

fukahile: おっと、自己紹介まだでしたね。私の名前は深沢英明（ふかさわひであき）といいます。今は、犯罪やDVの被害者、自殺未遂者や過去に薬物中毒だったひと、いろいろな社会的、精神的ダメージを負ってしまった人たちのための横のつながりの構築を支援する

NPO法人の代表をやってます

shiu: 行方不明者の情報なんかも警察よりよっぽど速いしアテになるぜ

mamoru: それで成瀬課長のこともわかったんですね

fukahile: うん。匿名の書き込みがあつてね

shiu: それで奥さんのDB上の登録っていうのは？

fukahile: 8年前に埼玉で起こった主婦をターゲットにした大規模な詐欺事件の被害者の中に成

瀬さんの奥さん、成瀬香織（かおり）さんの名前がありました

fukahile: リンク送りますね。http://xxxxxxxxxxxx

shiu: なるほど これはおれも知ってる

mamoru: 僕も記憶にあります

fukahile: そのページの一番下の方なんですけど、成瀬香織さんは詐欺グループとの訴訟にこぎつける直前に事故で亡くなってるんです

shiu: 何コレ 見通しの悪い交差点での衝突事故 不審男性の目撃証言があるも警察は事故として処理って

fukahile: 当時被害者グループの中心だった成瀬香織さんがいなくなった影響もあつて、結局その詐欺グループは不起訴に終わりました

shiu: 完全に陰謀

fukahile: うちはこのいう警察が関与できない、もしくはしてくれない案件の駆け込み寺だからね。当時ずいぶん大きな話題だった

fukahile: おっと、もうそろそろ行かないと

fukahile: 実は成瀬孝男さんについては、ほとんど人付き合いが無かったみたいでうちのネットワークを使っても情報が全然出てこないんだ

fukahile: でもまた何かわかったら連絡しますね

shiu: よろしく願います

fukahile: ではまた

深沢がチャットから抜けた。



そのあと秀は、護の成瀬孝男への同情と詐欺事件への警察の対応の悪さへの怒り、成瀬香織の不遇のやるせなさ、それらもろもろの憤りを聞きながら頭の中ではここまでの状況を整理していた。成瀬香織は、ある友人の紹介で近寄って来た詐欺グループの一員の女に金銭を騙しとられた。しかもその成瀬香織の友人という近所の主婦は、彼女を巻き込むことで自身の負債軽減が約束されていたらしい。それらを知らぬまま、成瀬香織はその友人を含めた皆のために奮闘し、そして最期は消された。最初から関わりさえしなければこんなことにはならなかったのに、と成瀬孝男が思っていたかどうかはわからないが、これは真正正銘の見紛うこと無き悲劇だった。

さらに護の話が確かならば、成瀬孝男は両親を早くに亡くし苦学生、妻の香織を失ってから天涯孤独の身だったのでは、とのことだ。仮に成瀬孝男が『なるたか』だとして、身内もない、仕事もパツとしない、そんな中年がふと人生が嫌になつて世の中から姿を消したとしてもさほど不自然ではない。それに護との約束をすっぱかしたのも、待ち合わせ場所に来たところで相手が元部下の田畑護だということに気付き、反射的に逃げた、と考えられる。また、既に『なる

たか』はこの世のひとつではないのではと秀は想像した。

一方護は『なるたか』がネカマだったとしても別に構わない、と言う。確かに秀もそれには納得できた。ログから拾った護と『なるたか』のやりとりは、いわゆる男女のそれではなく、お互い何か支えを探しているもの同士の心と心のやりとりだったからだ。

護は昔から詩を書くのが好きだった。周りのやつらにとってはそれは恰好のイジメのネタでしかなかったが、秀は純粋に尊敬していた。自分の想いや主張をクチに出してしゃべることができないもどかしさは秀にも護にも共通していた欠点だったが、護はクチでは言えない分ちゃんと別の出しどころを持っていたのだ。それは秀の目にはものすごく羨ましく映った。

『なるたか』はその護の詩に対して自分の経験を重ねてコメントしたり、自分もそれに合わせて詩を書いたりしている。他の人間からのレスポンスはあまり活発ではない。それもそうだと秀は思う。そもそもひとの心に共感できることなんて少なくて、今回それがたまたま合致した2人は、大げさかもしれないが奇跡そのものだ。それが若い女性だろうと禿げ上がったオヤジだろうと関係ない。秀は素直にそんな気持ちになれた。

shiu: ナルセに会いに行ってみたらどうなんだ

mamoru: 実はそれなんだけど、今朝総務の人たちが騒いでたのが、家はすでに数年前に引き払ってたらしくて

shiu: 引越先は？

mamoru: それも、デタラメだったんだ

shiu: なんだそれ 会社はどうする気なんだよ

mamoru: 正直、会社に成瀬課長の安否を気にしてる人はあんまりいないんだ

mamoru: 今日も成瀬課長の部署の課長代理

mamoru: 僕の同期なんだけど、そいつがみんなを仕切って普通に仕事してた

shiu: おいおい寂しいもんだな 人ひとり消えてるってのに

mamoru: どうしたらいいかなあ

shiu: 会社のデスクでもあさってみたらどうだ？公共料金の請求書とか そういうのが出てくれ

ば住所はわかる

mamoru: さすがにそこまでは……

shiu: ま、おれも無理強いはいしねえよ でもネットとおれの人脈からできることはこのくらいまでかな

mamoru: うん。シュウくん、ホントにいつもありがとうね

護の感謝の言葉の嵐を適当に畳んでチャットを閉じた。



春の陽気に誘われて窓を全開にする。数ヶ月ぶりだろうか。秀は南向きの窓から射し込む陽射しをかわしながらベッドに寝転がった。

秀はほぼ全貌が整理できたと感じていた。そして護は恐らく成瀬のデスクを漁るようなことはしないだろうし、成瀬は遅かれ早かれ死を選ぶ。アカウントや自分の痕跡の一切を消したのは、つまりそういう意味なのだろう。

秀は普段から睡眠時間は4時間か5時間程度で、睡眠が足りてないわけではなかったが、ど

こか頭がぼうつとしてした。こういうことは秀にとつては、何かに深く関わったり多くの情報を得たりした後にはたまにあることだった。これは脳ミソが一生懸命に情報処理をしている時間なのだとは秀は考えていた。こういう時は寝てしまうに限る。

ノートPCに電源アダプターを挿し、携帯を充電器にはめ込んで、惰眠を貪ることに決めた。

秀はメールの着信バイブで目を覚ました。寝転がったまま携帯を開き内容を確認すると、目覚ましの犯人はサーバーからの通知メールだった。

すぐに飛び起きてPCを開く、サーバーからの通知が示していたのは『なるたか』からのアクセス。それは秀がサーバーに仕込んでいた仕掛けだった。しかし単に『なるたか』が使っていた自動巡回のプログラムが主人なき今も動き続けているだけかもしれない。慎重にその後のアクセス履歴をなぞる。すると、すぐに判断ができた。

誰かが『なるたか』のPCからネットへアクセスしている。

つまり現状で成瀬が生きている可能性が高い、という意味だった。秀は携帯を拾い直すとともに護宛にメールを書く。

「本文」

なにがなんでも今日ナルセの荷物を調べて住所を割り出せ！まだ生きてる可能性が高い！

「END」

しかし最後の送信ボタンを押そうとしたところで秀に一瞬の迷いが生じた。成瀬孝男の失踪は本物だ。しかし『なるたか』と成瀬孝男を結びつける理由は十分なのか？

とはいえ悩んだところで結論が出ないことはわかっていた。成瀬孝男について情報が少な過ぎるのだ。あるのは『名前』と『失踪のタイミング』のみ。ある日の失踪者の中に『なるたか』に当てはまる名前の人物が複数いるとは考えにくい。そして護の前に姿を現さなかった理由も成瀬孝男ならば説明がつく。

しかし「そもそも自分が成瀬孝男に対してどれだけこだわる必要があるのか？」と考えると、秀の気持ちは徐々に萎えていった。

「非合理的だ」

ボソリとつぶやき送信ボタンを押す。もはやここから先は護に任せるべきではないか。秀は『なるたか』のアクセスログを取るだけに留めることにした。コマンドを叩きソフトを起動させ手順を終える。そして好奇心から発する胸のモヤは押し殺したまま再びベッドに横になった。

秀が管理するサーバーにアクセスしている今なら、個人情報まで抜き取ることすら不可能ではない。ウィルスを送り込むこともできる。チャンスであることは確かだったが、秀に『彼女』のプライバシーに深く触れる権利なんて微塵もないのだ。

すぐにメールの着信音が鳴る。護からだということとはわかっていて。

「本文」

どういうこと？でも、やっぱり荷物を調べるなんて……

「END」

護のやる気が無いなら構わないと秀は考えていた。おれはできることはやった。あとは護次第だ、と。

「本文」

理由はあとで説明する。うまくいけばまたナルセに会えるかもしれないぞ。

「END」

「本文」

ホントにそれしか手は無いのかなあ……

「END」

「本文」

無い。とりあえず無い。おれには

「END」

秀は思考を止めていた。護の返信には少し間があいたが、その間、秀はただボーツと天井のヒビ割れを目で追っていた。

「本文」

わかった。

「END」

護からの反応は秀にとって意外なものだった。護は自分の私利私欲のために、他人の荷物を漁ったりプレイベートを詮索できるような人間ではないことは、秀がよく知っていた。山奥で1万円札を拾ってそれをわざわざ警察に届けにいく種類の人間だ。そんな護を動かすものは何か、それは恐ろしくシンプルな『なるたかを助けたい』という心だ。秀は気恥ずかしくなると同時に奮えた。

護のような心を持ってない自分は、好奇心と興味と、単にテクノロジーという武器を行使することに対する欲求だけで動いている。本心では『なるたか』のことなんてどうでもいいのだ。

だから護に託した。護がやめると言うならスッパリこの件に関与することはやめ、逆にやるというならトコトン付き合おうと考えていた。

そして護が選択した。

自分には良心もご立派な正義感も無い。なので護の意思に従おう。そう考えると秀のスイッチが切り替わった。



ゆっくりと日が傾き始めた。秀はタバコも吸わず、ひたすら画面上に見え隠れする『なるた

か』と格闘していた。すでに『なるたか』アクセスは無くなっていたがネットの接続は切れていない。それを利用して秀は『なるたか』のPCに潜り込んだ。すぐさま住所を特定できる書類、メールなどのスクリーンをかけ、同時にファイルを経由でコピーし手がかりを探した。

「チクショウ、ほんとに空っぽのPCだな！」

『なるたか』が作ったと思われる文章とそれをまとめたファイル、お気に入りのサイトのリスト、その程度の情報しか手に入らなかった。秀が最後の望みをかけたのは写真ファイルだったが、それも家の中で撮った静物の写真と、おそらく窓から撮ったらしき空の写真が数枚。特別な物や建物が写っていたれば場所の特定に役立つのにらんでいたが、写真はどれも秀の期待していたものとは異なっていた。

苛立ちを隠せない。

秀は「一度頭を切り替えよう。能率が落ちてる」とつぶやき、数時間ぶりにタバコをくわえた。『なるたか』がアクセスしている場所はかなり狭いエリアにまで絞り込むことができていたが、それでもまだ範囲内に十数軒の家と大きなマンションが2つあった。成瀬孝男が会社にすら住所を隠していたことから考えると、ご丁寧に表札が出ているとも思えない。しらみつぶしに当たれば見つけることは不可能ではないが、それが現実的な手段とは思えなかった。

秀は携帯でそのエリアを確認しながらベッドと冷蔵庫を往復し続けた。  
すると護から着信、電話だ。

「もしもし、どうだ？」

「今、デスクのところに來てる」

護の声のトーンが警戒心を強くはらんでいることで、周りの様子をうかがいながら慎重に話していることがわかった。

「何かありそうか？」

「デスクの引き出し、は、ほとんど鍵がかかっている」

「ガードが固いなあ」

何か対策を考えなければ、と秀はベッドに腰を下ろしタバコを乱暴に灰皿に押し付ける。音を立てないように極力気を配りながら机を搜索する護の緊張が伝わって来て、秀の心拍も心持ちスピードを上げていた。

「そうだ、個人のロッカーってあるのか？」

「ん？あるよ。オフィスの端っこに」

「そっちをあたってみるのはどうだ」

「うん。いま行ってみる」

護の靴音や、スーツの衣擦れや吐息をただひたすら受話器を耳に当てて聞き続ける行為は秀の心を締め付けた。足先は細かく貧乏揺すりを繰り返して、加速度的に首の凝りが悪化していた。

カチャンという鍵を開けた音とゆっくりとスチールの扉がきしむ音が聞こえる。

「すごい」

護がつぶやくと秀は堰を切ったようにまくしたてた。

「どうした？何があった？前も言ったができれば公共料金の請求書だ。他には郵便物でもいいし、ただし極力どっかの会社からの勧誘やなんかじゃない方がいい。あとは財布や定期入れ、私物なんかあれば、その中にひよつとしたら手がかりがあるかもしれない！」

「秀くん……きれいさっぱり何も無いよ」

秀は自分が肩から脱力したことを感じた。それと同時に期待を膨らませ過ぎていた自らを反省した。仮に成瀬孝男の失踪が計画的なものだとしたら、当然予測すべき結果だったのだから。

しかし全く手がかり無し、というのはさすがにこたえる。『なるたか』のPCからもめばしい情報は得られていないし、このままでは手詰まりだ。

その時、護が小さく「あつ」と発声したのを秀は聞き逃さなかった。

「どうした？」

「一枚、写真が落ちてた。ちよっと古い写真みたいだけど……」

「よし、護、一度そこからは離脱して、その写真を携帯で撮って送ってくれ！」

「うん、わかった。これは……」

「いいな、よろしく、一度電話切るぞ！」

護に対するねぎらいも無く慌ただしく電話を切ってしまったことに少し申し訳なさも感じたが、秀にとってはそれどころではなかった。

画面上では再び『なるたか』のアクセスが始まっていたのだ。



サーバーには前回と違う罫を仕掛けてあった。今回は秀にとっても覚悟が違う。自らの自信作を投入し万全を期していた。するとサイト内の各所にちりばめられた罫のひとつに『なるたか』はあっさりとかかった。すぐさま秀はキーボードを叩き、しばらくの間、獲物を睨みつけ威嚇するかのよう画面に食い入る。

「きた！」

小さくガッツポーズを作ると同時に護からチャットが入った。

namoru: 時間切れ。オフィスに人が帰って来た。いまは仕事しているフリ

namoru: さっきの写真、携帯に送るね

shiu: こっちは大収穫ありだぞ

namoru: どうしたの？

shiu: なるたかのPCのカメラをハッキングした

shiu: 音声は来てないが映像は出せそうだ　ちよっと待ってろ

namoru: さすが！すごいよシユウくん！！

画面に映し出される『なるたか』の光景は、カメラの向きがズレているようで『なるたか』自身は映し出されておらず、画面下半分が黒っぽいデスクの表面、上半分にかろうじて部屋のドアと萎れかけた背丈ほどの観葉植物が見えていた。南国風の幹に垂れ下がった特徴的な葉。ポニーテールという種類だ。そしてその横に書棚らしき木製のラック。秀はそのラックに見覚えがあった。先ほどまで格闘していた写真ファイルのひとつに、このラックの上に写真立てとピンクのぬいぐるみが飾ってある写真があった。

『なるたか』がそこにいるのかどうかは判別できなかったが、手元のアクセスログが順調に溜まっていくことから何者かがネットにアクセスしていることだけは確かだった。そしてそのサイトが何であるか秀には確認ができていた。

その時、深沢がチャットに加わった。

fukahile: 桐島くん、メール見ました。僕から提供できる情報があるよ

shiu: ぜひお願いします

fukahile: C市K町で不審な一軒家の報告が

fukahile: いつも出入りしているのは中年男性だけで奥さんや家族がいるようには見えない

fukahile: にもかかわらず、近所のスーパーで買う食料品の量が一人暮らしとは思えない量らしい

fukahile: また何度かその中年男性が女性ブランドの買い物袋を下げている姿が目撃されている

fukahile: 2階の部屋のカーテンがいつも下りているのだが、子供が「お姉さんの部屋だ」と言っていたんだとか

shiu: お姉さん？

fukahile: 通り一遍に捉えると典型的な監禁事件だと考えられるね

fukahile: 参考までにその情報提供者の位置情報を送るよ。本人に許可は取ってあるので

shiu: そういえばこっちもネタありますよ フカさんにも画面共有します なるたかのカメラのハック映像です

fukahile: 見えました。相変わらず桐島くんは無茶やるねー。逮捕されないでよw

秀は深沢から送られて来た『情報提供者』の位置情報をマップ上に配置する。IPアドレスから割り出したエリアに見事に入っている。しかも、ここからそう遠くない。

その時、秀がチャット画面から目を離していた間に深沢からのコメントが溜まっていた。さらに履歴を見ると護が「現場に行ってみます」とだけ言い残してチャットから抜けていた。あのバカ、先走りやがって。

shiu: どうしました？

fukahile: 映像見てなかったの？いま、人が通ったよ

画面には開きっ放しになったドアとその先に廊下が映し出されていた。

shiu: アーカイブしてるんですぐに見直します

『なるたかカメラ』のライブ映像は随時録画して1分ごとの動画ファイルに保存するようにしていた。秀は手際良くここ1分間のファイルを取り出すとすかさず再生させた。確かにグレイのスウェット姿の人物が画面上を右から左へドアの方へと歩いて行く姿がとらえられていた。

shiu: 一瞬だから男女の判断がつかないですけど

fukahile: 服に見えたの、血痕……だよね？

shiu: だと思います

shiu: 赤黒くなっていたので時間が経ってるかと

fukahile: どういうことだろう？

shiu: すみません 一度落ちます



秀はチャットを閉じるとすぐに護の携帯番号を呼び出し何度もコールする。しかし地下鉄に入っているのか電源が切れたのか、それともわざと切ったのか。一向につながらなかった。現場では何か血なまぐさいことが起きている。秀は護が『不相応な』バイタリテイで深く関わり過ぎ、そのために傷つく姿を見るのもう嫌だった。

おそらく護は現地まで行ってしらみつぶしにあたるつもりなのだろう。地図に示された辺りは住宅地なので一軒家は多いが、情報提供者から辿れば同じブロックか隣近所で十中八九間違いない。それに情報提供者本人をあたって教えてもらおうという手もある。こういうときの護は何でもやると秀は確信していた。



すでに護がチャットを離れてから15分以上が経過していた。護の会社から現場へは電車で2駅程度の距離で、すでに着いていてもおかしくはない。

「そうだよ……そうだろう！」

秀は突如何かに気付くと自責の念から頭を抱えた。しかしすぐに気を取り直し、携帯をハンズフリー状態でコールし続けながら、ゴミ箱に入れていた『なるたか』の写真ファイルを取り出し再び入念にチェックする。

「ビンゴだ……」

部屋にあった木製ラックとピンクのぬいぐるみ。『なるたか』が家で撮ったと思われる写真だ。その写真ファイルのデータの一部であるメタ情報に、GPSの位置情報が含まれていた。それを取り出し先ほどの地図と重ねると指し示されたのは情報提供者の家の向かいだった。

場所は割り出せた。「マモル、出てくれ……」祈るような気持ちで秀は電話をかけ続ける。すると突如電話が繋がった。

「マモルか？」

「うん」

「場所わかったぞ、あの位置情報あったぞ」

「いや、いいんだ。もう着いたから」

「そうか。どうだ？」

「死体があったよ……ひとり」

「ひとりか？オイ！」

「ごめんね……シユウくん……ありがとう」

護が電話を切った。秀が画面に映る映像を見つめると、ドアの隙間から見える廊下を護が通り過ぎていった。そして、秀は一瞬目を疑ったが間違いない。護の右手には包丁と思われる形状の刃物が握られていた。

「ありがとう、じゃねえだろ！何してんだよ！」

携帯を握りしめると、秀は護が送ってくれた成瀬のロッカーにあった写真を見ていないことに気付いた。自らの手柄に溺れ、失念していた。後悔の念と共にメールを開き添付ファイルを見ると、それは家族写真だった。左には、深沢から教えてもらった記事で見たのと同じとおりのどこか優しさと強さを持ち合わせた成瀬香織の笑顔。右には、固く引きつった下手クソな作り笑いを浮かべる小柄な中年男性。そして2人の真ん中には小学校高学年くらいの女の子が写っていた。香織の血をきちんと引いたらしく、可愛らしい大きな目に整った顔の造形、そしてそれ

だけではなく、どこか大人びた強さも感じさせるような凜とした笑顔を持ち合わせていた。そしてこれは中年男性の誕生日に撮った写真だったようで、写真の右下にメッセージが書いてあった。

「お父さんお誕生日おめでとう。いつまでも3人で一緒にいようね。多香子」

何かを考える前に秀は走り出していた。普段は楽なサンダルばかりだが、半ば反射的にスニーカーを履いた。ノートPCは置いた。携帯も持ち忘れた。地図は頭に入っている。とにかく、走ることでもしか何も解決に向かわないことを秀は頭ではなく身体で受け止めていた。

普段まったく酷使することのないふくらはぎは、屋上から5階分の階段を駆け下りただけで既に悲鳴を上げていた。筋肉に痛みを感じること自体、秀にとっては数年ぶりのことだった。

上は長袖のTシャツ一枚で下は季節外れのハーフパンツ。外はまだ春のぬくもりは十分ではなかったが、走って行くには好都合だった。

秀は明るいうちに外に出ることも正直ほとんどなく。特別な用事や仕事の待ち合わせ、何かの発売日、それ以外の外出は基本的に夜に済ませた。それは秀が服装についてズボラであることと、それ自体を自ら自覚しているという微妙なバランスで成り立っていた。直すべきだとわかつてはいるが直す気にならない。そんな自己都合の葛藤の解決策として典型的なひきこもりのスタイルを選択していた。

しかし今は沈みかけた夕日を背に受けて全力で走っている。

はたから見ると明らかに不健康なルックスの青年が必死の形相で不格好な醜態をさらしているだけだった。足下も蹴りが弱く、太腿は上がらずバタついていたが、本人はむしろ爽やかな疾走感すら覚えていた。

「すぐに頭よりも身体が動いた自分は、まだ捨てたもんじやない。捨てたもんじやないぞ！」携帯もPCも、デジタル機器は全て置いて来た。身体ひとつ、『なるたか』の元に駆けつけたとしても、そこからの戦略も何もあったもんじやない。とにかく現場に向かう、という意味と、無計画と、魂から出る言葉とで突き動かされていた。

裏道を通り抜けて大通りに出る。すでに思うように動かなくなってきた足の分を腕の振りでカバーする。別にもっと有効な手があったのではないか、などと秀は考えなかった。秀は自分自分でないような気持ち良さを感じ、戸惑いと高揚から、声を出し笑った。

夕日はその赤橙色の熱で秀の枯渇寸前のパワーを補い、優しく歓迎していた。

◆  
『なるたか』の家は近かった。地図で見た記憶が確かならば直線距離で1キロも無いはずだ。しかし秀の膝は情けないことにガクガクと震え、ふくらはぎは痛みを通り越して感覚が無くなっていた。閑静な住宅街の古い木造の一軒家の前で秀は二階を見上げた。カーテンは固く閉ざされていて内部の様子を伺うことはできない。「いくぞ」と小さくつぶやくと、数段の石段をのぼり迷い無く玄関のノブを掴んだ。するとドアはあっけなく秀を迎え入れた。

「護！」

玄関口から叫ぶと階段の方から鍵が閉まる音が聞こえた。秀は靴を脱ぐことなく階段を駆け

上がると2階に部屋は2つ。正面に見えるのがハッキングしたPCがあった部屋だった。半分ほど開いたドアから記憶にある木製ラックとピンクのぬいぐるみが見えた。秀はすぐさま廊下を通り抜け突き当たりのドアノブを握る。しかし回らない。当たりだ。

「開けろ！護！」

力づくにドアノブを捻つても無理矢理開けることができそうな手応えではない。ドアを叩きひたすらに叫ぶ。

「お前がやろうとしてることは間違ってる！開けろ！」

ドアを蹴飛ばすが秀の脚力ではあっけなく跳ね返されてしまった。繰り返し、どなるように訴える。

「お前、言ってたじゃねえか、小学生のとき、おれは覚えてるんだぜ、罪は罪として償わせないとやり直すチャンスを奪っちゃうんだろ！言ってたよな！」

秀は踵を返しPCの部屋に戻ると迷い無く観葉植物を両手で掴み、鍵で閉ざされたドアの前へと引きずっていった。

「開けろ、護！わかつてる」

部屋の中からの応答は無いが、ひと息置いて続ける。

「死体は……成瀬孝男なんだろう？」

ポニーテールの幹を握りしめ、振りかぶる。秀にとっては持ち上げるのがやつとの重さだ。しかし咆哮とともに叩き付けるようなスイングで鉢を2度打ちつけると、ドアの中央部分に直径20センチ程度の穴が開いた。すかさずそこへ左腕を突っ込み手探りで鍵を開ける。左腕は木片の端で切った複数の箇所から出血し、Tシャツの袖口が血で滲んだ。



部屋の中に入るとすぐに秀の目に入ったのは、座り込む10代らしき少女と、その側に横たわる50代半ばの首筋から血を流した男性の死体だった。その2人の背後の壁と床は流血で赤黒く染まっていた。

そしてその2人から距離を取った部屋の逆側に、スーツ姿とはどう見ても不釣り合いな包丁を握りしめたまま立ち尽くす護がいた。護の顔に滲むのは、狂気でも衝動でもなく、そこにあったのは、いつもの正義感と勇気と優しさを持ちあわせたフチの太い眼鏡をかけた気弱そうな青年の姿だった。秀はそれを確認すると、ゆっくりと護に歩み寄り、手から刃物を取り上げた。

「わかつてる。わかつてるから。……でも、お前には似合わねえよ、こういうのは」

秀の声のトーンは恫喝ではなく優しさと共感に満ちていた。護もそれを感じると、強張っていた身体を緩め、ひざから崩れ落ちた。

「ごめん、ごめんね……」

秀は護の肩に手を置くと、少女の方へと向き直った。

成瀬多香子は長い黒髪と真っ白な肌、そして手足がスラッと伸びたその美しい容姿とは裏腹に、瞳の奥は闇で満たされていた。多香子は香織が生きていた頃に小学生だったということは、年齢は少なくとも高校生以上であることが予想できるが、秀の目にはそれよりも幼く見えた。多香子のグレーのスウェットの胸部の広範囲と左腕の袖口には既に乾ききった血痕があった。

「手首切ったくらいじゃそう死ぬるもんじゃないぜ。わかっただろ。サイトは参考になった

か？」

多香子は目線を伏せている。

「護にも教えてやるよ。彼女がお前に何て言ったかわかんないけどさ、このコ、本心では死にたくないんだよ」

眼鏡をズラして涙を拭っていた護が顔を上げる。

「秀くん……どういうこと？」

「今のおれの仕事はな、フカさんに頼まれてあるプログラムを作ってるんだ。簡単に言うとな、自殺関係の単語で検索したらやつらが強制的にフカさんのNPO法人のページに飛ばされる。そういうネット上のウイルスプログラムだ。エロサイトとかに飛ばすよくあるスパムの応用だけど、当然あんなのとは比較にならないくらい巧妙な作りになってるんだぜ」

その時カーテンの隙間から漏れ入る赤い回転灯に秀は気が付いた。

「彼のNPOでやってるのは、犯罪被害者や社会的弱者の救済と援助だ。そのページが開かれて、すぐ閉じるやつはどうにもならない。とっとと死ねばいいんじゃないやねえの、とおれは思うぜ。けどな、あのページを見てまだそこをウロウロするやつは」

秀が多香子に視線を送ると、護もあらしを理解できたようだった。

「死にたいんじゃないかって、救われたんじゃないのか、とおれは思う」

依然、多香子はうつむいたままだが全身の力が抜けたように見えた。それが解放の脱力だったのか、落胆だったのか。結論は護に任せれば良いと秀は考えていた。

「まったく、全力で走ったのも、こんなに大声出したのも久しぶりだぜ」

パトカーのサイレンの音は徐々に大きくなり、護と多香子の泣く声は具合良くかき消された。



秀が警察署から出るとすっかり夜は暮れていて肌寒さを感じた。

「お、護」

振り返ると、長い廊下を背中を丸めながら歩いてきた護の表情は疲労感に満ちていた。秀は当然それに気付いていたが、あえて明るく続けた。

「タクシーチケットもらっちゃったな、護ももらったか？これ使って帰えろうぜー」

護は首だけでうなずくとゆっくりと秀の脇を通り過ぎていった。2人はそのまま大通りに出るとタクシーを拾い、とりあえず護の家を歩き先に告げた。

「秀くん……」

「ん？」

「僕は……『なるたか』、多香子ちゃんが危ないんだと思ってたんだ。殺されるかもって。でも違ってたんだよね」

「そうだな」

護は少し微笑みゆっくりと独り言のようにつぶやく。

「秀くんはわかってたんだね。やつぱりシェウくんはスゴいなあ」

「全部が全部ってわけじゃないけどな。マモルは、『なるたか』が女性だってことは直感的に確信してたんだろ？なんとなくそれはわかってたよ。さらに『なるたか』は終わらせたがってた。でも成瀬孝男はそうじゃなかっただろ、監禁するほど愛情を注いだ娘がいたんだから。そうすると『なるたか』は別の人物だ。そして恐らくそこには何か全てを終わらせたくなるほどの後悔や絶望があるはずだ、と考えたら……な」

「あそこの部屋でしばらく多香子ちゃんと話したんだ。監禁された時の話。最初は多香子ちゃんはまだ幼かったから正直よくわからなかったみたいで、でも、しばらくして状況を理解した。自分が普通じゃない状態にあるってことに」

タクシーはビルの谷間を抜けていく。歩道では帰宅路を急ぐサラリーマンたちの群れが信号待ちの人垣を築いていた。

「多香子は逃げ出そうとしなかったのかな」

「逃げようとするのと暴力にあったらしい。でもその度にお父さんが泣くんだって。それで『お父さんには私しか無い』って納得しちゃって、それから受け入れ続けたみたい。実際お父さんは監禁すること意外はむしろ普通以上の愛情を注いでくれて、服も本もおもちゃもぬいぐるみも、最近ではインターネットを使うことにも何も言わなかったらしいんだ」

「ネットにつながってそのままじゃいられないよな。結局、護と会う約束をしまったわけだ。で、当日、こっそり出かけるつもりが成瀬孝男に見つかっちゃったのか」

「いや、そこは違う。彼女は……お父さんに正直に話したんだって。わかってくれると思ったって」

「そうか……」

「わかってくれると思ったんだって、さ」

護はその後のことについては語らなかったが秀にも想像ができた。

多香子の申し出を聞いた成瀬孝男が逆上し、多香子を刃物で脅す。もみあううちに孝男の頸動脈から血が噴き出し、あの光景が出来上がった。多香子は改めて父親の存在と自分の存在との関係性を思い返し、父がいらない今、自分が存在している価値はないと考え自殺を試みた。自らの痕跡を全て消そうとしたのは、『父のための存在』だった自分が社会に残す足跡に後ろめたさを感じたのだろう。

そこから先は秀が回収した多香子のアクセスログが物語っていた。手首を切るも死にきれず、死に方を求めてネット上をさまよい、そして秀の罠にかかった。

「消えるように死にたい、彼女が言ってたよ。それで……餓死するつもりなんだと言って……悲しい目をしてた……」

窓の反射で見える護の目からは涙がこぼれていた。

「それで……僕が……」

「もう言うな、言わなくていい！」

護の肩を抱き、秀は優しく、強く、語りかけた。

「お前のやろうとしたことは間違ってたけど、やらなかったじゃないか。殺さなかったじゃないか。それでいいじゃないか」

「でも……秀くんが来てくれなかったら……きつと……」

「おれは来ただろ？それでいいじゃないか。一人じゃ何もできないぞ。逆に、おれは一人だったらそもそも、この件に関わろうなんて思わなかった。護がいたからだ。つまり護がいたから、多香子は救えたんだよ」

「うん……ありがとう……」

信号を左折し大通りを外れる。護の家はもうすぐそこだ。

「あ、会社に何も言わないで出てきちゃった」

鼻水をすすりながら護が言う。

「どーでもいいだろ、その程度。ちょうどいい機会だから言っとくけど、お前な、あの仕事いい加減考え直した方がいいと思うぞ」

「え、そんなこと言われたって、僕にできることなんて……」

「あるじゃねえか、いっぱい。第一なあ」

その時、護の携帯が着信音を奏でる。秀は目で「携帯見ろよ」と合図する。

「あ、これ、Fukahi Ieさんからのメールだ」

「やっぱりな。あのおっさん」

「ひよっとして……あのときパトカー呼んだのも？」

「だろうな」

秀は護の方へ身体を寄せ、携帯を覗き込む。

「で？何て書いてあるんだ？」

2人で内容を読み上げると、秀の顔には得心、護の顔には困惑がそれぞれ浮かんだ。

「僕、こんなこと言われたの初めてだよ……どうしよう……」

「やれよ。救えよ、みんなを。おれには、その助けくらいしかできないけど、護は違う。おれ、昔から護をけっこー偉いなと思ってるんだぜ」

タクシーは右折左折を繰り返しながら住宅地を進む。護が眼鏡の奥の涙も拭かず驚きの表情で秀のことを見つめた。秀はそれを感じていたが、照れくさくて視線を逸らした。

終 (400字詰め原稿用紙換算74ページ)